
IF—輝ける明光

輝ける星光

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IF―輝ける明光

【Nコード】

N6969Q

【作者名】

輝ける星光

【あらすじ】

西暦5000年代、地球。かつての大戦争によって滅亡に瀕した世界は、3000年の時をかけ科学と魔術により復興を遂げた。まったく異なる新世界として。新たな時代でも人々は相争う。巨大な軍事力を持つ帝国に滅ぼされた小さな国が、反旗を翻したその戦いも、数ある闘争の一つであった。

第1話：終末と再生（前書き）

こちらはリレー企画『輝ける星光』の関連作品、のパロディです。冒険者の艦アストライアの、もう一つの可能性。今作の作者はういいちです。

第1話：終末と再生

西暦2000年代末期。

六度目の世界大戦で使用された自律型機動兵器端末群と、721基の大陸間弾道弾による無差別攻撃によって、惑星環境は徹底的に破壊された。

勝者のないまま終息した戦争の後、深く傷付いた地球に訪れたのは、それまで存在していた生命の大半が死滅した荒廃の時代だった。人類もまた総数の約9割を喪失し、黄昏の時を迎える。

回避シエルターに身を隠し、致命的な危機をやり過ごす事で生き残った一握りの人間達。彼等は人類という種が滅び去ることを恐れ、長年に渡り培ってきた科学の力と、連綿と伝えられる魔術の神秘力を用い、存続の方法を模索していく。

遺伝子操作によって、苛酷な環境下でも生き永らえる強靱な次世代種の創造。

残された僅かな生体サンプルの培養と複合を繰り返し生まれた、新世界適応型の動植物達。

大規模魔術障壁による保護と、癒しの加護を加えた劣悪環境からの守護。

既存の生命体を高次の機械部品で換装し、あらゆる状況に対しての適性向上化を図るサイボーグ躯体の応用。

環境改善修復を目的としたナノマシンによる大々的テラフォーミング計画。

世界各地の地脈に高純度の魔力を大量に流し、疲弊した大地へ命を吹き込む活性化処理。

世界は人々の手によって様相を一変させながら、辛うじて再生の道を辿りだす。大陸の形状や生態系の一大変革が、新たな時代の始まりを告げていた。

それより3000年余。かつての面影を失い、まったく異なる形

で世界は存在する。

第2話・目覚める鼓動（前書き）

執筆者ういいち

第2話：目覚める鼓動

『現在、帝国軍は都市オルセルドにて展開中。無人魔導兵器の一個小隊を確認。都市住民は既に退避を完了させており、帝国軍により都市の制圧が進められている状態』

四方の壁、床に天井、その全てが近しい距離にある閉鎖空間。そこへ淡々とした女性の声が響く。抑揚のない無機的な音声は、狭い空間内に色艶なく浸透する。

これを聞きながら、霧川禾槻はゆつくりと目を開けた。見えたのは闇。全てを飲み込む漆黒が世界を覆い尽くしていた。それでも彼には何処に何があるのか理解出来る。慣れ親しんだ感覚として肉体が覚えている。だからこそ自身を取り巻く幾多の機器を、例え見えずとも操作し始める事が可能だった。

まずは手元のボタンを押す。次に隣のレバーを倒す。腕を伸ばし、暗黒の先に沈んだスイッチを押し込む。流れる動作で他の作業も進めていくと、次第に空間内全体を淡い蒼光が照らし出した。各種装置の起動灯が作る弱性の明かりに闇が払われ、青年を囲む世界の姿が暴かれていく。

そこは人が一人収まるだけで限界を迎える手狭な空間だった。周囲を冷たく硬い物質で固められた中に、一人用のシートが据え置かれている。禾槻はそのシートに深く腰掛け、背凭れに体を密着させる形で座っていた。着ているのは浅黄色の羽織と黒い袴。周囲を埋めるのは壁と一体化している数多の計器やボタン群。

彼の顔には黒いバイザーが下ろされ、肘掛の位置に左右の手が掴む為の操縦桿がある。其処は科学の粋が集められた個人用コックピットだ。禾槻以外の生命体は存在していない。

『敵軍の規模は小さいですが、油断は禁物です。無人機と侮り掛かる事のないように』

突然、禾槻の眼前にモニターが出現した。三次元座標検出システ

ムによって立体化されたホログラムモニターである。その中に白を基調とした軍服に身を包む、白髪の女性が映っていた。二十代前半と思しいその女性は、感情味のない冷めた貌で禾槻を見る。

『この都市の解放を成功させれば、我々は市長に大きな貸しを作る事が出来ます。他国との交易で豊かな財源を持つオルセルドの協力は、今後の活動に於いて絶対に必要です。必ず敵勢の殲滅を行ってください』

映像内の女性が口を動かすと、コックピット内に冷淡な声が満ちた。任務の厳命を告げる紫の瞳は、優しさや温かさをまったく宿していない。

「了解」

凜々しくもきつい顔立ちの上官リナ・レイツェンへ、禾槻は浅く頷き返す。それを確認するとモニターが消え、女性の声も聞こえなくなった。

続いて機械で合成された中性的な音声が、幾つもの状況情報を伝え始める。

『魔導機関供給管と連結完了』

『慣性制御開始』

『機関出力43%確保』

『待機推進停止』

『魔導障壁全推力に移行』

『頭部及び各種内蔵センサー開放』

『背部バーニア展開』

『全システムオールグリーン』

刻々と伝えられる内容に耳を傾けながら、禾槻は細い指先で周辺パネルを打ち叩いていく。指動に合わせて青年の周りへ新たなホログラムモニターが三つ、四つと出現する。半透明の画面上には英数字の羅列や魔導言語式が浮かび上がり、高速で流れ随時更新されていた。

絶え間なく変容する情報がモニター内をスクロールし始めてから

数秒後、禾槻の正面へ何番目かの画面が浮かび上がる。それは他と比べてやや小さく、出現自体を遠慮しているように感じられた。全体の構成は他と同じ、半透明で淡い蒼色をしたモニターだ。何も無い空間上に内から外へと広がるよう出現した小振りな画面を、バイザー越しに禾槻は見詰める。その中央へ、女性の顔が描かれていた。ウェーブのかかった長い金髪を持つ、澄んだ碧眼の女性だった。艶やかな前髪の下には、品良く並んだ眉と涼しげな眼差しが見える。均整の取れた貌は美しい造作をし、整った鼻梁と、桜色の小さな唇を具えていた。白く滑らかな肌は新雪のようで、過不足なく完成された容貌は、春風にそよぐ花のように可憐である。

二十歳前後だろうモニター内の女性は、穏やかな碧眼へ禾槻を映し、儂げな微笑を刷いた。

『こちらの準備は整いました。何時でもいけます』

モニター内で桜色の光沢を宿す唇が動き、鈴が転がるような細く軽やかな声が流れる。その音は耳に心地良く、優しい子守唄に似て聞く者の心を和らげた。

禾槻は口元を緩め、柔らかな笑みを浮かべる。だが次には憂いの表情を作り、氣遣わしげに女性へ応じた。

「分かったよ。エレーナ、出来るだけ早く終わらせるから、少しだけ我慢していて」

『私のことは気にしないで下さい』

「いいや、すぐに終わらせる」

首を左右へ小さく振り気丈に返す女性——エレーナへ、禾槻は表情を引き締め、硬さの増した声で対する。

尚も何か言いたげな顔をエレーナはしていたが、二人の短い会話はそこで終わった。彼女が口を噤むと正面モニターが消え、コックピットには再び禾槻の存在のみが残される。

その中で青年の両手が動いた。すぐ下にある操縦桿を左右それぞれへ握り、確かな感触が伝わるまま定位置から奥へと押し込む。操作機の動きと同時にコックピット内に微かな駆動音が響き、四方を

埋める装置群が一斉に目覚め稼動した。各々が独自に輝かしい明光を発し、操縦席全体に微弱な振動が伝わってくる。

『ロストアーム 遺失魔導兵装、ヴィシャリス起動！』

操縦桿を強く握り、禾槻は叫ぶと同時に手前へと一気に引いた。これを契機に重々しい咆哮が轟く。此の世の全てを圧倒し、押し潰さんとする巨大な雄叫びだ。

コックピット内部が激しく揺動し、次いで凄まじい衝撃が禾槻をシートへと押し付けた。正面から叩きつけてくる逃れられない重圧に、奥歯を噛んで青年が耐える。激震と圧迫は尚も続き、直撃へ見舞われる者の有様などお構いなしに加重を増していった。

数秒後、不意に全ての感覚が失われる。今まで襲っていた衝撃が消え、無重力空間に放り出されたような錯覚を禾槻に与えた。何処か深い場所から、鼓動に似た駆動音が継続的に聞こえてくる。無数の配管を流れる循環液は脈動、轟く機器の低い唸りは筋肉の収縮、まるで人体内部に囚われたような、生々しくも熱味ある蠕動が耳朶を打った。

『アイセンサー起動』

機械の中性音がコックピットに弾む。その瞬間、眼前に下ろされたバイザーが外界の映像を灯し、禾槻の網膜へこれを転写した。

第3話：戦いへの序曲（前書き）

執筆者ういーち

第3話：戦いへの序曲

黒煙を上げる街並みを、高い位置から巨大な剣が見下ろしていた。夜の闇が厚い帳を下ろしきった世界で、白亜の巨体を宙天に輝く満月で照らされながら。

全長にして136m、全幅37m、あまりに巨大な一振りの剣。それは一隻の魔導飛翔艦だった。切っ先が艦首に相当し、剣身中間部に艦橋、握り部分が主力機関区に、そして柄頭が推進装置となっている。鍰^{がく}に見立てられる部分が主翼として大きく張り出し、流れる夜風を触れる端から切り裂いた。

長大な刀身が務める艦体部分には、蒼と白とで彩られた盾の紋章が刻印される。西大陸グレゴリウムに存在した、秩序と正義の守護者アルハルト公国の国章である。

天空に浮かぶ巨艦は、アルハルト公国魔導空挺団所属戦略制圧用高機動強襲旗艦アストライア。現存するアルハルト公国最後の戦力であり、最後の領土。大陸征服を推し進める軍事国家グロバリナ帝国に滅ぼされた故国復興と、暴虐なる帝国の野心打倒を旨とする反乱軍の拠点だった。

アルハルト公国の遺臣団を中心に生まれ、大陸の解放を掲げる反乱軍。その全戦力が集中する旧文明の遺跡艦は、帝国の放った無人魔導兵器に美しい都が蹂躪される様を眼下へ敷く。

大陸南東部で自由交易を行い発展してきた都市オルセルドは、帝国への従属を拒んだが為に肅清の憂き目に遭っているのだ。グロバリナ帝国は自らに逆らう者を圧倒的な武力によって叩き潰し、恐怖と力で近隣諸国を併吞してきた侵略国家。その牙と爪は研ぎ澄まされ、あらゆる敵を情け容赦なく引き裂き喰らう。残忍で獰猛な野獣そのもの。恐るべき帝国の前に、いったいどれだけの誇りと尊厳、自由意志とささやかな願いが踏み躪られてきたことか。

逃れられない破滅に見舞われ、オルセルドは今、かつての栄華栄

光を失おうとしていた。都市の中を我が物顔で歩き回る、自律型機動兵器の群。それは魔導装甲を纏い、強大な破壊の力を揮う無慈悲なる執行者。ただ壊し、殺す為だけに存在する古の戦争が生んだ悪鬼の申し子達だ。

マントのように見える外部装甲を靡かせ、家々を潰し、商店を破き、教会を蹴散らして、高い列塔を叩き壊す。其処彼処で火の手が上がり、夜の街並みは赤々とした紅蓮に染まった。暗い夜闇を照らす猛火が暗黒を払拭し、重厚な破壊兵器の行進を恐々と浮き上がらせる。

地獄の鍋底を幻視するに足る光景を艦下に眺め、アストライアは高度領域に滞空し続けた。ただ何もせず、損なわれていく街の全容を傍観するだけ。強大な兵力と国力を持ち、今や西大陸全域を版図とせん勢いのグロバリナ帝国には、かつて祖国を噛み砕かれた反乱軍も太刀打ち出来ぬと諦めたのか。

否、違う。

真新しい炎と噴煙が何本も方々で上がり始めた時、アストライアに動きが起こった。刀身の根元、棟区部分むねまちが下方へと開き出し、艦の内外を隔てる厚壁が引き下ろされていく。それによって現れたのは、アストライア第三層区に位置付く格納庫だ。

大型機動兵器を数機格納しているスペースが口を開け、大量の外気を夜風と共に受け入れる。色のない流風を受け止めて、格納庫の端へと歩み立つ影があった。二足で体を支え、両腕にはそれぞれに武器を持ち、眼下の街並みを静かに見下ろすもの。それは確かな人型をしてはいるが、けして生命の律動を刻む生物ではない。

そもそも大きさから規格外だ。足先から頭頂までは大凡10m強。全身を白い装甲で覆い尽くした鋼鉄の巨人である。鋼板を踏み締める二脚と、銃身の長い機関砲を握る両腕は細く、重ね合わされた装甲の上から見ても重量感や鈍重さはない。腰部に於いても同様で、体重移動と方向転換の迅速さを考慮した設計から、女性のように細やかに引き締められている。

コックピットが設けられている胸郭は外装も厚く、やや前方へ突出気味。両肩はそれ以上に大きく、強烈な存在感を示していた。その右肩部分にも、蒼と白とで彩られた盾の紋章がある。背部では出来損ないの翼とも形容出来る短翼状のパーツが上面へ迫り上がり、バックパック装甲からバーニアスラスターユニットを覗かせた。

頭部に口や耳、鼻といった部位は存在せず、ただ中央へ彫り込まれたスリット型高感度センサーへ赤い光点が瞬くばかり。その光は横並びに四つと、中心に一つ。見れば全身装甲の継ぎ目や開けた平面部にも、同様の光点が確認出来る。180度全域をカバーする複合センサーというわけだ。

白き巨躯は無機种的であるが故に威圧的、巨大ならではの雄々しさを備える。機械仕掛けの戦士は、しかし不思議と無骨さを感じさせない。寧ろ、洗練されたフォームは優美でさえある。

3000年の昔、世界を焼き尽くした終末戦争。その時代に造り上げられた魔導機関搭載型の搭乗式人型機動兵器。今はもう失われた技術によって構築される大戦の残り香、それが遺失魔導兵装^{ロストアーム}。古代の発掘兵器という意味ではアストライアと同じ存在、兄弟とも呼べる代物である。

旧文明の高度な科学と魔導技術が結合し生み出された闘争の鎧は、その内奥に青年を抱え、真紅の壊都を赤光に捉える。燃え盛る大地を睥睨し、夜風を全身に浴びながら佇むのは僅かな時間。誰が何を言うよりも先に、巨体の膝が僅かに曲がり、腰が浅く沈められた。時を同じく背部バーニアがノズルの深奥へ青白い光を灯す。

次の瞬間、ノズル全域が豪光を発し、バーニアが盛大に噴射された。急激に膨れ上がり、溜めもなく爆発した推進力に機体が押され、重厚な白鎧は前傾姿勢で鋼板の上を滑っていく。大量の火花を撒き散らし、耳を劈く異音轟かせ、機動兵器ヴィシャリスは格納庫から飛び出した。

遮る物のない大空へ進出した機体が、背部バーニアの出力を活かしてアストライアから離れ始める。雄大な夜空を舞う機体。その軌

跡を青い粒子がなぞり、拭えない暗闇に鮮やかな明光を描き出した。遠い地平を望みながら闇の海を疾駆すると、凄惨な都市の処刑がより明瞭に認められる。

地上で蠢く黒い軍勢。帝国が送り込んできた魔導兵器の群目掛けて、白い巨兵は徐々に高度を落としていった。手酷く荒らされた街の姿が次第に近付き大きくなる。それへ合わせてヴィシャリスの体ができ上がり、前傾から腰を落とす立ち様へと移行する。

空中での姿勢変化を終えて程無く、機体は荒廃の都市へ堂々と舞い降りた。背部バーニアを噴かして推力を調整し、乱れた路面に深く素早く接地。着陸の衝撃をオートバランサーで相殺しながら、盛大に土煙を上げて十数m一気に滑る。

その最中、両脚が掛ける制動のまま方向を転換し、機兵が体ごとで振り返る。備える重量のままターンが掛かり、半弧を描いて巨軀は見事に停止した。

空中からの直接降下を成し遂げた後、ヴィシャリスの両腕は即座に動き、機関砲を左右へ翳す。自身を挟み込む形で展開する敵勢の動き、これを確認するのは頭部スリットで忙しなく動き回る赤光点。突然の乱入者に、黒鎧兵装は包囲を固める。時間は然程も掛かりはしない。何故なら禾槻の操るヴィシャリスは、あるうことが敵軍の真ん中へ食い込んでいたのだから。

そう、予定通りに。

第4話：闘争の白（前書き）

執筆者ういいち

第4話：闘争の白

前後から歩み寄ってくる帝国の尖兵。黒い外装で覆われたそれは、ヴィシャリスと同程度の大きさを持つ人型の無人兵器だ。白い機体よりも一回りは装甲が厚く、俊敏さはあまり感じられない。その代わりに堅牢そうであり、攻防能力の高さが窺えた。

全体を夜の闇にも負けぬ黒一色で統一した敵機の胸郭には、黄金の鬘を持つ獅子が一本の剣を咥えた意匠、軍事国家グロバリナ帝国の紋章が刻まれている。肩口から下ろされ、背面と腕部を隠すように設けられたマント型の外部装甲によって、携行しているだろう武器は判然としなかった。それでも敵が確かな攻撃能力を有し、しかも無人機であるが故に躊躇のない攻勢を取る事は知れている。油断も安心も出来よう筈がない。

じりじりと距離を詰めるのではなく、大胆に直線距離を突き進んでくる帝国魔導兵器達。行動は粗雑で単純だが、小細工を弄さぬからこそ純然たる火力は大きい。とかく都市制圧を目的として投入されるタイプは、基本行動が破壊活動による都市機能の消滅にあり、それが為パワー重視の戦闘モデルであるのが常だ。

まともに組み合うわけにはいかない。数の上でも圧倒的に不利。それでもヴィシャリスは単機で乗り込んできた。即ち、勝算があるということだ。

黒い敵機が一定距離を越えた時、ヴィシャリスの指が機関砲のトリガーを引いた。右手に握られていた長大な銃身が震え、三連装の砲門から大量の弾丸が吐き出される。その一発一発が正面に陣取る魔導兵器へと向かい飛び、胸部や腹部一帯へと次々に着弾した。高速で射出された弾丸群は黒い装甲へ激突するや、眩い火花と強い衝撃を生み食い込んでいく。回転する弾頭に合わせて厚い護りが螺旋に決れ、何十という侵入物が一瞬にして防御を突破する。

在るべき壁を容易く穿った弾丸は、進路上の配線及び機器の繋が

りを破壊した。一切合切余さず突き抜け、引き千切り、熱と力で焼いて砕いて食い破る。命中した弾という弾が等しく直線軌道を愚直に進み、躯体深奥に組み込まれた魔導機関へ到達するのに要した時間は僅か数秒。

強固な装甲と頑健な防護壁とに囲まれ、機体の中心部に位置付く銅鐸型の装置。それが旧文明が生んだ魔導兵器の心臓である魔導機関だ。撃ち込まれた弾丸群は悉くが外壁を突破して、この銅鐸へと飛び込んでいく。最後の防壁を突破された中枢機関は逃げることも叶わず、前方位から差し迫る連弾に造作なく貫かれた。

初撃によって齎される弾雨が最重要部を破壊した時、帝国魔導兵器の一体は頭部スリットの光点を消して停止する。それまで続いていた動きが完全に止まり、その場で微動だにせず立ち尽くす。

魔素、或いは魔力と呼ばれるもの。それは特別な術式を以って操ることで爆発的なエネルギーを生み出し、超自然的な現象を任意に発現させられる魔法の源。神秘の力。大気へ溶け込み多量に漂うこれを自動的に収集し、動力へと変換する装置が魔導機関だ。魔導兵器との戦いとは、この魔導機関を如何に破壊するかである。

幾層もの防衛装甲に護られた心臓部を、二度と活動しないよう機能停止へ追い込むのは難しい。圧倒的な力で防備ごと打ち貫き損壊させるというのは、非常に乱暴で短絡的な手段だが、しかし最も確実且つ効率的な方法であった。

最初の一体を撃破するのと並行して、ヴィシャリスは左手に装備する銃器の引き金も絞る。長さとしては右手の機関砲と同等だが、全体に太く重量感がある。発射機構が働き、洞穴めいた暗い銃口から放たれたのは榴弾だ。

空中を滑り、左方から距離を縮める魔導兵器へ突撃する。比較的薄い弾殻は対象の胸郭へ触れた直後に破裂し、収められていた炸薬を解放した。伝わった衝撃が内蔵火薬を刺激して、連鎖反応的に爆発を引き起こす。夜闇に咲いた紅蓮の華は、爆風と灼熱で漆黒の装甲を炙り、積層する鋼の護りを吹き飛ばした。

たった一度の爆発で何重もの防護域を喪失し、魔導兵器の胸郭には黒々とした大穴が開かれる。盛大に砕け散った装甲片が火の粉共々街路へ落ちる最中、ヴィシャリスの左手は狙いを違えず第二射を撃ち放った。反動で銃身が俄かに跳ね上がるも、その時には既に榴弾は目標へと直進している。

塞ぎようのない欠落へ吸い込まれていく爆裂弾。遮蔽物の存在しない空洞を邁進し、辿り着くのは深奥の銅鐸であった。逃げ場のない魔導機関へ弾頭が接触すると、弾殻が爆散して大量の熱波が荒れ狂う。機体内部を猛火と衝撃が駆け抜け、各機関を高熱量で融解させる。機体の心臓部は粉々に粉碎され、原型留めぬまま爆炎へ飲まれ消滅した。

左右に陣取った帝国機を撃破した時、後続の敵機体が反撃行動を起こし始める。行進中だった黒い隊列の歩みが止まり、マントを打ち振るって片腕が持ち上げられた。正面へ向く黒い腕部機構には指がない。丸みを帯びた楕円型の掌には四つの穴が開けられており、その奥深い闇がヴィシャリスを捉える。

前触れもなく穴が唸り、そうかと思えば鋭い刃が四つの空白から躍り出てきた。それは細く長く鍛えられた特殊鋼の鋭爪。鈍く輝く破壊の爪は夜闇を掻き分け、鞭の如く長々と伸びる。一瞬の間に多大な距離を踏破して、一切の感情を差し挟まず、獲物目掛けて襲い掛かった。

だがその攻爪が標的を貫くことはない。撃ち出された爪の接近に応じ、白い機体が上体を逸らす。僅かな動きで襲撃勢の進路が違えられ、四つの刃は目的を遂げずに虚空を抜ける。素早く走った爪はヴィシャリスの装甲を削らぬまま、紙一重の差で側方を越えた。

鋭爪を寸で躲し、その出所へ白い左腕が巨銃の狙点を定め直す。再度照準を合わせると同時にトリガーが引かれ、高い破壊力を秘めた榴弾が黒兵装の頭部を吹き飛ばした。続け様に絞られる指へと応じ、連続して放たれる炸裂弾頭に帝国機の胸部、魔導機関が相次いで撃碎されていく。

その間にも別方向から同様の襲爪が迫り来る。これへ対しヴィシヤリスは背部バーニアを点火し、急性的な移動措置にて回避を実行。舞い飛ぶ爪の間隙を縫い、路面を高速で滑り走った。四方から襲う攻撃を巧みに避け、一撃さえも装甲へ触れさせずに土煙を引く。

後退から横滑り、前進、即時の方向転換、あらゆる機動を華麗にこなし、踊るように全ての攻撃をやりすくす。これへ加えて右腕に装備する機関砲を斉射し、正確に攻撃主を叩き壊した。眼前を掠めた爪があればその基点へ銃口を向け、連弾で装甲を貫き潰す傍ら、左腕では別の機体へ榴弾を撃ち込む。帝国機の攻勢を悉く掻い潜り、それと同時に敵勢体の躯体を容赦なく破壊する。

前後からの挟撃に際してもヴィシヤリスの動きは流麗であり、苦もなく横方へすり抜けると銃撃を返す。軽快に反転して敵機を体面に据え置き、前方の黒には機関砲、後方の装甲には爆裂弾と、異なる大火力を同じタイミングで命中させた。

走り続けながら更に方向を変える白機の、巨大な右肩部装甲が展開される。強健なショルダアーマーが上下へ分かれて開かれると、内部に納められていた大量の小型ミサイルが露となった。半瞬後、総数56発というミサイル群が同時発射され、それぞれが多方向へと進撃していく。誘導弾倉から解放されたマイクロミサイル達は、個々に設けられたホーミング機能に従い帝国魔導兵器を猛追する。

恐るべき速度で飛翔するミサイル群からはどの機体も逃れられず、20へ及ぶ魔導兵器が瞬く間に接近され、次々とこれへ激突。双方の接触が誘導弾を起爆させ、凄まじい衝撃と業火からなる爆発に敵機を沈めた。方々で巨大な余波が脈打ち、水面へ生まれた波紋さながらに熱火は震え広がる。暴力的な破壊の顎が着弾対象を噛み砕き、硬い覆いを鉛細工もかくやに溶かしてしまう。爆心地では多大な損壊を遂げた黒い装甲が瓦礫へくずおれ、激しい火柱がこれを包み聳えていた。

半壊した都市は荒々しい朱に染め上げられ、燃え滾る焰に地平までが舐められる。濛々と噴き上がる黒煙と、天を突かんと立ち昇る

大火に彩られた街並みに、白い巨人は堂々たる威容で佇んでいた。
周囲を焦がす破滅の色に照らされて、全てを砕く破壊者は高らかに
得物を掲げる。

第5話 円卓の軍議（前書き）

執筆者ウラン

第5話 円卓の軍議

大きな円卓が真ん中にあるだけの、広い部屋。

イスもなく、それどころかドアも窓すらない完全な密室。

良く見ると、円卓の一定間隔をあけた場所に小さな窪み……いや、小さなレンズがはめ込まれている。

不意に、一筋の光が空を貫いた。

光は徐々に幅を得ていき、遂には薄い板となる。

光の板——立体ホログラムディスプレイには、蒼い外套と重厚な鎧を着込んでいてフルフェイス仕様の仮面を付けた男の姿。

遅れて、数十というディスプレイが円卓の上に浮かび上がった。

老若男女、まさに様々な人々の顔が映っている。

全員が集まったことを確認した仮面の男——ティダリテス・オルグレイアは宣告を開始した。

『今回、諸君に集まってもらったのは他にもない、アルハルトの反乱軍についてのことだ。連中は戦略制圧用高機動強襲旗艦アストライアを拠点にしており、我が軍は調査も兼ねて無人機を送り続けた。しかし、それはもはや意味がない、と陛下が判断を下された。故に、次回は一部隊を派遣することに決定した』

ディスプレイから、おぉ、という歓声上がる。

『——13番隊隊長、アリア少尉！』

『はい』

数あるディスプレイの一つ、長く艶のある黒髪の14、5くらいの少女が映されたそれから、落ち着いた声が響いた。

『貴行ら13番隊に、今回の襲撃を任ずる』

『お待ちください！』

すると、二十歳くらいの若い金髪の男が映ったディスプレイから抗議の声が上がる。

『何故ですか！？ 13番隊といえば、いき場のない軍のならず者

どもが集まっているゴミ部隊ではありませんか！ そのような貧困街出の小娘が隊長を務めている時点で力不足など目に見えております！ ここは我が9番隊にお任せを——」

『口を慎まんか！ デイゴリック・コバルト中尉』

勝手に言い進める若者を、いかにもベテランといった風の中年の男が嗜めた。

『仮にも一部隊の隊長に小娘呼ばわりとは何事だ！』

それに、と彼は続ける。

『誰に向かってものを言っているのかを理解しているのか？』

『——っ！ も、申し訳ありません』

『……では、これをもって今回の軍議を終了する。我らがグロバリナ帝国に栄光あれ！』

そう言った後、始めに現れたディスプレイは一筋の光へと戻り、空虚に消えた。

後を追うように、他のディスプレイも次々と姿を消していく。

最後には、二つのディスプレイのみが残った。

金髪の若者、デイゴリック中尉と先程彼に注意をかけたベテラン

風の中年の男だ。

『やってくれたな』

『……すいませんでした、中佐』

『まあ、失敗など若い内にいくらでもしておけ』

だが、と彼は続ける。

『オルグレイア元帥だけには絶対に逆らうな。これは忠告と取っていい』

『……はい、肝に命じておきます』

それで険しい雰囲気は少し和らぎ、中佐は次の論題へと話題を移した。

『して中尉、貴官は勘違いをしている』

『……？ それはどういうことでしょうか？』

『アストライアは戦略級の襲撃大艦だ。その上数体の最上位機を収

納しているらしい。ここまで帝国に対抗するだけのパイロットもいるだろうしな。まだ未知の部分が多いアストライアヘー隊をぶつけることの意味がわかるか？」

『……捨て駒？』

『そういうことだ、中尉。13番隊は問題ばかり起こす輩が勢ぞろいしているしな。第一、本来は12番隊までしかないはずなんだ。軍としても早々に排除しておきたい存在である。切り捨てるには丁度いい』

『成程、そういうことでしたか』

『それに、隊長のあの女、あいつは——』

「反乱軍、ですか。愚かな者達ですね」

少女にして13番隊の隊長を務める彼女、アリア少尉は誰もいない虚空へと語りかけた。

「大衆の決めた意見に納得できず、批判を受けても我が意を通そうとして孤立する。まるで我儘な子供のよう」

丁寧な言葉使い、それでいて容赦のない物言い。それが彼女のスタイルだ。

「武力による支配も立派な政治。綺麗事ばかり言っただけで民をまとめられない国などクズも同然です」

——秩序と正義の守護者？ 笑わせる。

と、彼女は誰ともなく言った。否、確かにそこには何もいないが、彼女は確実に誰かへと話し掛けていた。

『……反乱軍が我儘な子供なら、帝国は理不尽な大人。帝国にとって反乱軍は悪、反乱軍にとって帝国は悪。自身は正義、敵は悪。これ、世界の理』

通信の類ではない。脳に直接訴えかけるような、音とも光とも言

えぬ思念の波動。

「ええ、そうでしょうね。それに私も、帝国のすることに何の疑問ももっていないわけではありません。しかし、帝国は私を救ってくれました」

彼女の名はアリア、孤児だったために姓はない。

社会のゴミとして、盗みを繰り返して生きてきた。

14となって軍に入隊。ある大戦で独断の作戦を無断で展開し、成功。

帝国は完全実力主義ゆえ、それによって一気に少尉、及び一隊の隊長まで上り詰めることができた。

帝国は、彼女に居場所を与えてくれた。

それが問題児ばかりの『13番隊』だったとしても、彼女のかけがえのない居場所には変わらない。

「隊長！」

突如、二十歳ほどの金髪青眼の青年が話しかけてきた。

13番隊副隊長、ルイ曹長。それが彼の肩書きだ。

「一人でアストライアに攻め込むとはどういうことですか!？」

理解できない、と言わんばかりに彼は押し入る。しかし、アリアの対応は冷静だった。

「13番隊は現在集団として機能しておりません。力ある者が単に集まっただけでは、足を引っ張り合って自滅するだけです」

「……………」

思い当たる節でもあるのか、ルイは戸惑いながらも反論できないようだった。

「それに、私達の目的は反乱を止めることであり、反乱軍を絶命させることはありません。まあ、それも方法の一つですが」

しかし、と彼女は続ける。

「それはあまりにも不効率すぎます。こちらの被害は勿論のこと、反乱軍の乗員の腕も中々のものですから」

敵をも仲間に組み込もうとする姿勢など驚くことではない、とル

イは思った。

この人は使えるものは何でも使う、そう――

「ですので、例えば反乱軍の非戦闘員などを虐殺なんてしたら戦意は簡単に削がせられると思うのです」

そう、アリアはやわらかな笑みを浮かべながら言った。

その笑みを見て、言いようのない恐怖がルイを襲う。

「ああ、そう言えばアストライアにはルイ曹長の幼馴染が乗員しているのでしたっけ？ それなら全面的に賛同していただだけそうになりですね」

と、アリアは思いだしたかのように言った。

それでも中止するのは愚か、幼馴染本人とわかってても殺すのが彼女だと、ルイは不幸にも知っている。

ルイもアリアと同じく貧民街出の孤児で、それなりに酷い環境の中にいた。

だが、それでも彼女の狂気なまでの姿勢は理解できそうにない。

「……あなただけは、例え帝国全土を敵にまわすようなことがあっても、あなただけは敵にたくありません、ね」

「そんな悲観しなくても大丈夫ですよ。あくまで例えて、今回それをするつもりはありません」

最後に「今の所は」が含まれていることは安易に予想できた。

「こっちは思いませんか？ たった一機、しかも『ブレード』のような最低ランクの機体に最上位機をもつても圧倒されたら、抵抗する気など微塵もわいてこないのでは、と」

「……な、にを……」

出動準備を終えている『ブレード』を見て、ルイは驚嘆した。

――まさか、彼女はそんなことをやってのけるというのだろうか？

「ブレードと言えば、フォトンブレードしか持っていない最弱の機体ではありませんか！」

フォトンブレード
光粒子の剣。

威力は高いが、エネルギー消費が激しい上に有効範囲が極端に短

い見かけ倒しの武器。

まず当たらない、しかしもしまともに受けたら——、という牽制くらいにしか使われないはずの戦わない武器。

「一応、仕掛けトリックはありますよ。まあ、確かに私だけでは作略もなにもあったものではなかったでしょうけど。しかし、私達私達ならば」

——できますよね、とアリアは問いかけた。

その相手は、目の前の副隊長ではなく……。

『……アリアがそう、望むのなら』

機体の能力を最大限まで引き出すために創……られた第二人格“ラグナ”は、その主であるアリアだけにそう告げた。

そしてアリアは今度こそ、その落ち着いた表情のままルイ軍曹へと宣言する。

「『アリア／ラグナ少尉、出陣します』」

第6話・其れは猛り狂う狂犬共（前書き）

執筆者ういいち

第6話：其れは猛り狂う狂犬共

交易都市オルセルドを蹂躪した漆黒の軍団は今、空より飛来した一機の魔導装甲によつて壊滅の憂き目を見ていた。当初は50あまりも展開していた帝国魔導兵器達は、半時にも満たぬ間で半数以下へ激減している。帝国に対し反旗を翻した抵抗組織の遺失魔導兵装^{ロストアーム}によつて、次々と撃破されていったのだ。

それは戦いとも呼べない一方的なものだった。純然たる破壊兵器である無人魔導装甲が、赤子の手でも捻るように容易く破壊されていく。黒き軍勢の攻撃は一つとして白い機体を捉える事が出来ないのに対し、ヴィシャリスの銃撃は悉く敵機の中枢機関を貫いた。

白き魔導装甲の華麗な機動に、黒の無人機は一切追いつけないでいる。基本性能の圧倒的な差、操縦者の卓越した技量、この二点によつて双方の間へ越え難い開きが生まれていた。

それも当然と言える。現在稼動している白い機体ヴィシャリスは、3000年の昔に世界を焼き尽くした終末戦争末期、全てを破壊するほどの戦力として建造された最終兵器の一つだからだ。数ある遺失魔導兵装^{ロストアーム}の中でも最強の称号を頂く世界崩壊の担い手、僅か13機のみで南半球の全てを灰燼と帰した最高にして最悪の兵器。人類技術の至高傑作、魔導兵装最上位機『闘神の依代』。

一度完全に目覚めれば、終末の日を再演し得る極限兵器に、量産仕様の無人機が敵う道理はない。未だ機能の多くを眠らせ、当時ほどの性能を引き出すには遠く及ばないものの、都市制圧を目的として送り込まれた魔導兵装を一蹴するなど造作もないことだった。それを駆るのが強靱な精神力と不断の努力で、過酷な訓練を耐え抜いた精兵中の精兵ならば尚の事である。

巨大な帝国と戦い、これを打倒することを目標に掲げる反乱軍の戦士には、何よりも高い実力が要求される。絶対的な暴力と無慈悲な野心で全てを組み敷く帝国へ挑むのに、綺麗事はいらない。魔導

旗艦アストライアを拠点とする反乱軍は、ただ只管に敵を挫く為の力を求め、それを体現し得る兵器及び人材の発掘と育成に注力してきた。その結果として獲得されたのが古の遺産『闘神の依代』、そしてこれをまがりなりにも操れる優秀なパイロットなのだ。

魔導兵装最上位機を扱うことは、決して簡単なことではない。心身に尋常でない負荷を掛ける厳しい訓練は、常人ならば精神崩壊を引き起こすほど。本来であれば起動運用を行う生体部品、機体の一部として造られた専属パイロットが搭乗し、初めて稼動する代物である。現在では既に専用操縦者も、それを製造する技術も失われて久しい。これを部外者が扱おうというのだから、容易にいく筈もなかった。

最強の遺失魔導兵装『闘神の依代』^{ロストアーム}を使役するには、パイロットの生命維持を度外視した戦闘特化型の重機動に耐え、的確に機体を運用するだけの卓越した操縦センスが要求される。

またコックピット内に搭載された高感度戦域情報システムは、常時活動戦地での敵勢機動及び周辺情報の認識と処理更新を行っており、高速計算された膨大な戦闘情報をパイロットへフィードバックし続けている。その情報量は通常の脳機能の処理速度を超過し、絶えず流入する大容量のタクティカルデータが、10分と保たず搭乗者の頭脳回路を焼き切ってしまう。これを受容するだけの脳髄活動域確保と、目まぐるしい超情報量に自身を見失わない強靱な精神力がなければ、何も出来ない。

血の滲むような鍛錬、大量の投薬、ハイリスクな脳手術、身体改造、あらゆる手段で体の随所を弄り回し、機体への適合性を高めない限り操る事は不可能である。また過度な調整を繰り返せば肉体は疲弊し、限界到達点の短縮、即ち寿命を著しく削ってしまう。

それほどの代償を支払い、反乱軍の戦士、霧川禾槻は帝国との戦いに赴いている。自身の命、人生までも懸ける彼を衝き動かすのは、正義感や使命感ではない。純粹にして単純な動機だった。グロバリナ帝国への怨み。暴虐なる帝国に大切なものを奪われ、踏み躪られ

た、それ故の復讐心である。

彼だけではない。アストライアに乗り合う反乱軍メンバーの多くは、帝国への拭えぬ憤怒と憎悪を持って戦いの道を選んだ。大陸の平安も、平等なる秩序再生も、故国再興も、実際には然して興味ない者が大半である。彼等は一様に、憎むべき帝国の打倒を夢想し、日々を邁進していた。

立ちはだかる帝国将兵の悉くを八つ裂きにし、その権限の全てを砕き、奪われたものと同等以上を奪い取り、絶望の辛酸を舐めさせ、地獄の業火へ叩き落す。連中の築いたものは須らく破壊して、描いた覇道を徹底的に瓦解させ、皇帝を玉座から引き摺り下ろし、凄惨な私刑の末に処断する。己の心を占める叛意と憤懣^{ふんまん}、濃厚な怨嗟が晴らされる瞬間を求め、彼等一同は結託して突き進む。

反乱軍とは帝国を追い立てる狂犬であり、その喉笛を食い千切る事しか考えていない復讐鬼の軍勢なのだ。盟主がどのような御題目を立て皆を率いても、個々の人員が抱くのは暗黒の害意に他ならない。

そして反乱軍の指導者は、このような同胞達を認めている。どのような過去と考えがあっても意に介さず、帝国打倒に向けて揺るがない信念を束ねられていられればそれでいい。重要なのは強大な帝国と真正面から戦える気概だった。どのような状況に追い込まれても怖気付かず、最期まで死力を尽くして帝国に挑み続ける強健な意志。例えば最後の一人になろうと、例えば手足を？がれ様と、帝国に一矢報いようという抵抗心こそが、最大の武器である。

反乱軍とは帝国が生んだ、帝国のみを付け狙う、帝国の敵。犠牲の末に戦う力を求め、不屈の闘志に猛り狂う怨念の従者達。最後の一人までが死に絶える瞬間か、仇敵たる軍事国家が権勢を失墜させて滅ぶまで、その歩みは止まらない。

第7話：見敵必殺（前書き）

執筆者ういいち

第7話：見敵必殺

度重なる戦闘で荒廃を極めた街並みは、かつての絢爛たる栄華を名残さえも遺しはしない。散々に破壊された街区は、大災害に見舞われた跡地を思わせる。建築物で損壊を免れたものは一つとなく、かつては人々で賑わった憩いの公園も原型を逸して荒地となった。方々に大量の瓦礫が散乱し、折れ曲がった鉄骨が其処彼処に突き出ている。路面も割れて砕けており、歩いて渡るには不向きな酷い有様だ。

街を包んだ活気と喧騒を遠い彼方に置き捨てて、今も商都は激しい戦火の只中にあつた。反乱軍の行動機ヴィシャリスが縦横無尽に市街を駆け、対立する帝国の無人兵器を相次いで破壊する。鋭い爪刃が幾つも飛び交い白機を追うが、ついぞ標的へ到達せぬまま返された砲弾が黒を潰す。

その最中であつて、ヴィシャリスの攻撃が及ばないにも関わらず撃滅される機体が出ていた。それらは唐突に頭部を拉げさせ、次には胸郭へ巨大な弾痕を刻み、内奥から猛火を噴いて爆散する。一体、二体、三体と、続け様に同様の末路を辿り、次々と帝国軍魔導兵器は機能を止めた。

しかしオルセルドの何処にも、新たな抵抗者の姿はない。屠り散らされる機体はどれもヴィシャリスから離れており、白い機体の銃口に狙われているわけでもなし。撃ち込まれる弾丸は、全てが死角から届けられたもの。それも全黒機が無警戒である頭上からだ。仰ぎ見れば容易に知れという距離でもない。それが解き放たれたのは遙か上空、地上から凡そ1万1000mもの高みであつた。

都市オルセルドを見下ろして闇夜に滞空する白亜の巨剣、魔導強襲艦アストライア。その格納庫ブロックは今も開かれたままであり、そこから一機の魔導兵器が雄大な地上世界を眺めている。前後に長い下半身へ六つの多脚を備え、巨躯を支えた濃紫の機体だ。上半身

の装甲も厚く、前方へやや突出する形で胸部が確認出来る。全高は12mあまり、人型というよりも重戦車という印象が強い。

両の前腕装甲下に二本の銃身が並ぶ重電磁力速射砲を併設、下半身後端には多弾頭のミサイルを搭載したランチャーポッドが四基装着され、背面から迫り出すバックパック装甲に細長い長方体の高出力レーザー射出砲塔が四門接続装填される。多脚にはそれぞれ広域殲滅用誘導式爆雷発射装置を仕込み、後ろ腰には六連装の回転式銃身を持つ大型ガトリング砲を装備、両肩と腹部左右両端へバルカン砲を内蔵する。

全身を多量の重火器で武装したそれは、反乱軍が保有する遺失魔導兵装『闘神の依代』が一機、大火力砲戦仕様遠距離戦闘用機ヴァニティスウエル。右肩部分には、所属を示す蒼と白とで彩られた盾の紋章が刻印されている。

近・中距離戦闘を主体としたヴィシヤリスに対し、遠く離れた場所から直接火砲支援によって敵勢を一掃する攻撃性能に秀でた機体だ。しかし何より特筆すべきは、同機が有す極端とも言える狙撃性能の高さにある。

濃紫の機体は現在、自身の体高すら超える長大な重機を両腕で構えていた。恐ろしく長い直方体の物体は、全長にして14mへ達する。白銀に光る外觀を持ち、全体へ幾つもの微細な溝を走らせていた。溝の上部、或いは下部へと小さな円が等間隔に並び、穴の奥から薄い白煙が噴き出し続ける。

両腕によって構えられた白銀の先端に、黒々とした奥深い穴が覗く。それは真つ直ぐ艦外へと伸び、漆黒の天空へ突き出していた。機体頭部に設けられたスリット内で赤く輝く光点は、この重機先端を凝と見据える。正確には直線距離で遙か遠方に存在する標的を。

人間の力では絶対に持ち上げられない巨大物体の後方部からは、幾本ものパイプやチューブが伸び出している。それらは格納庫の床面を這うように垂らされ、ずっと奥まで続いていく。アストライアそのものと連結し、エネルギー供給を受けているのだ。

長い鉄塊の底面を支える形で添わせられていた機体の左腕が、握る部位を手前へと引き、次いで後ろへと押し戻す。ショットガンのフォアエンドを操作するポンプアクションと似た動きだった。これへ応じ、長大な重機が内部より駆動音を上げ始める。低く唸る獣のような始まりの音へ通じ、白銀の全容へ青白い雷線が駆け付けた。それは一瞬であつたが周囲を光らせ、濃紫の巨体を煌々と照らす。

随所に開けられた穴から上っていた白煙が、一斉に途絶える。排出口が深部で塞がり、内圧を逃がさないよう働き始めた。次第に駆動音が高まりを増し、モーターの回転する高音と、忙しないシリンドラーの稼動音が重なる。

重機後方の下面部に付設されるトリガーへ、射撃準備の態で宛がわれた右腕。その指が動かされた。引き金が素早く絞られ、内蔵機関の発射シークエンスを実行させる。

直後、雷鳴の嘶きに相当する凄まじい爆音が轟き、航空機の地表激突とも思える衝撃が発生した。重武装による超重量を誇るヴァニティスウェルの巨体が揺動し、アストライアそのものが震える程の反動である。

天空の只中で驚異的な震盪^{しんどう}を引き起こし、それによつて重機先端から解き放たれたのは一発の弾丸だった。チタニウム合金で特殊加工された専用弾殻により、フルコーティングを施された劣化ウラン徹鋼弾。地上目掛けて悪夢的速度で降下する弾丸は、宵空にかかる夜雲を貫くと同時に弾き散らせる。尋常でない威力の秘められた一弾が遠大な距離を越え、目標へ到達するのに要した時間は一秒未満。廃墟と化したオルセルドで白い機体を狙う魔導兵器が、マント型外装を引いて一步を踏んだ時。超高高度からの飛来物は敵勢センサーへ確認されるより早く、黒い胸部装甲を一撃で貫通する。上空から襲いきた硬弾に防御層は容易く食い破られ、一瞬の抵抗さえも叶わずに刳り貫かれた。純粹な暴力の化身である徹鋼弾が積層する守護の防壁をゼロコンマで突破すると、内奥に収められる魔導機関もまた躊躇ない踏破に決り取られる。

破壊に併発する火花が散るより先に、無人兵器は機能を停止した。それより遅れて数秒後、内部で生じた構成機関の連鎖爆発により、魔導兵器は内側から炎を噴いて倒れ様に碎け散る。

彼我の距離1万1000mという桁外れの定点狙撃を、ヴァニティスウエルが正確無比にやってのけた瞬間であつた。

「よし、撃破」

眼下の世界で行われる目標物の破壊をバイザー越しに確認して、黒髪の青年は快哉を上げた。それと同時に右手を操縦桿から離し、胸の前でガッツポーズを決める。

彼が居るのはヴァニティスウエルのコックピット。非常に狭い空間を多様な機器が埋め尽くし、文字通り足の踏み場もない。閉塞感による息苦しさはあるが、戦闘時独特の高揚感に満たされるパイロット、レリオ・エリアスは不快感を表していなかった。

24歳という若さで大火力機を操るレリオは、癖の強い黒髪を奔放に伸ばしており、痩せているが引き締まった体付きをしている。身動きする僅かな挙措からアスリートの躍動感が感じられ、肉薄でシャープな顔は適度に焼けて健康的。精悍さと愛嬌を等分に宿す、軽快な印象の若者だつた。

オリブドラブのジーンズを穿き、白いワイシャツというラフな格好をしているので、巨躯の機兵を動かす操縦者のようには見えない。

「さて、次はどいつをやるかな」

気負いのない軽く陽気な口ぶりで、レリオは独語しながら視線を這わす。彼が見るのは機体に備わる全センサーへ直結する視覚補正装置、その端末バイザーが届ける遙か下方の戦場情報だ。

遠距離戦闘を仕様とするヴァニティスウエルが実装するセンサー類は非常に優れており、1万mもの差異を感じさせない明瞭な映像を常に搭乗者へ提供している。これと彼が持つ砲手としての天性の才能、艦載装備である大威力重狙撃砲が合わさり、ヴァニティスウ

エルは超遠距離からの神業的狙撃を可能としていた。

「随分と壊したからな。もう残り少ないか。ま、物量で押しまくる帝国にしちゃ、こんなのは蚊が刺した程度にしか感じないだろうけど。しかし塵も積もれば山となるだ、存外馬鹿に出来るもんじゃない」

軽口交じりに地上の状況を走査する。乗り慣れた機体、使い慣れたシステムなので、今や意識せずとも自然に扱う事が出来た。この段階に到るまで要した苦労は、余人の想像も及ばない。そんな背景を感じさせない明るさが、青年パイロットへ具わっている。

「うん？」

次の撃破対象を捜すレリオは、唐突に奇妙な違和感を覚えた。何か異質な物が体内に侵入してきたような錯覚に、思考が一瞬停止する。

その時だ。今まで地上の映像を送り続けていたバイザーが赤色光を放ち、視認情報を途絶えさせた。続けて耳障りな警告音がコックピットに響き渡り、幾つものホログラムモニターが出現する。画面内は赤く輝き、無数の文字列が同じ単語を繰り返す。

「おいおい、また異常かよ。出力係数が落ちてるぞ。バランサーの調子も悪い。これじゃ仕事にならないな」

レリオは特に慌てることもなく、寧ろ慣れた調子で嘆息する。

バイザーを額の上へと引き上げると、自身を取り囲んだモニターは無視して周囲の機器を操作していく。しかし何をやってもまともな反応は見られなかった。甲高いアラームとレッドランプの点滅だけが延々とリフレインする。

「まいったね、どうも。コイツは年代物だからな、ガタがきててもしょうがないか。それともハウエンツアの旦那がメンテナンスをサボったかな？ どっちにしろ、これじゃ役に立たない」

盛大に溜息を吐き、レリオは肩をすくめる。その後は近場の機材を脚で蹴り、操縦桿に肘をつけて目を閉じた。

鼓膜を圧する異常警報も聞き慣れたものなので、慌てず騒がずや

り過ぐす。

「禾槻に借りの一つでも作っておきたかつけど、次回に持ち越しだな。やれやれ、俺の愛機はヘソ曲がりで困る」

シートに身を沈めたまま頬杖をつき、レリオは欠伸を噛み殺して苦笑した。

遙か下方では反乱軍の同志でありパイロットを務める同僚が孤軍奮闘している最中だが、彼の姿に危機感はいく片もない。他者に無関心な酷薄さではなく、それだけ友人と搭乗機の実力を信じているのだ。たかだか無人魔導兵器の一個小隊程度、自分が手を貸さずとも快勝してしまうだろう。そう思うからこそ心配などしていない。

「この後でリリナにどやされる事を考えたら、そっちの方がずっと億劫だ」

生真面目で融通の利かない同年代の上官を思い浮かべ、レリオはここ一番の溜息を吐いた。眉根の寄った苦い顔が、周囲に灯る赤い光の中で頂垂れる。

第8話・ブレードVSヴァイシャリス（前書き）

執筆者ういいち

第8話：ブレードVSヴィシャリス

自機よりも多い敵の軍勢を掃討し、ヴィシャリスは廃都の只中に佇立していた。

もはや街とも呼べない有様のオルセルド、その跡地に立つ白い機体の周囲へ、破壊された黒い残骸が散らばる。帝国の魔導兵器であることを示す全容が維持された物、元がなんであるのか予想出来ないほど碎けた物、その末路は様々だ。しかしどれもが等しく機能を停止し、二度と動く事はない。一機残らず平等に、中枢制御装置である魔導機関が打ち壊されているのだから。

グロバリナ帝国の送り込んできた都市制圧用魔導兵器を殲滅したことで、白い機体とこれを操る禾槻の任務は終わった。あとは何時も通りアストライアへと帰還するだけである。だがヴィシャリスは帰路につかず、銃器を手にしたまま振り返った。

方々から黒煙を上げ、激戦の後を窺わせる凄惨な街並み。その全体を埋めるように敷き詰められた多量の瓦礫が、道という路を寸断している。手酷く痛めつけられた廃墟の中を、それでも委細構わず行進してくるモノがあった。体積した建築物の残片を蹴り飛ばし、踏み越えて、真っ直ぐにヴィシャリスへと突き進む黒い影。先刻倒し尽くした無人機と似た外観を持ち、マントの代わりに大きく展開したブースターパックを備えた機体である。

背部装甲に組み込まれた大口径ノズルから紅炎を噴射し、無人機を数倍する速度で機体は進む。全身装甲は帝国の黒、右肩に刻まれた紋章は黄金の鬘有す獅子と、その口へ咥えられた剣。グロバリナ帝国の所屬を教える。両手には魔導兵器用携行型出力端末を握り、そこから照射形成された魔力の光で刃が生まれていた。フォトンブレードと称させる近接戦闘武装だ。

瞬く間に距離を詰めてくる新たな帝国機、無人型とは違う有人型の汎用機体ブレード。これをセンサー系に捉えると、ヴィシャリ

スは何の臆面もなく機関砲のトリガーを引いた。右腕に装備された威力武装が装填弾丸を連続射出し、秒間数十発という一斉攻撃を行う。撃ち出された弾丸は空気層を貫通しながら高速度で目標へ飛翔接近し、その外装を破壊すべく襲い掛かった。

だがブレードは左手首を回転させ、握る刃を円形に振るう。魔力光の刃全体に切断攻勢力が宿る一刀は、次々叩き込まれる機関砲の弾頭を防ぎ、容赦なく破壊した。真正面より押し掛かる衝撃にも怯まず、背部ブースターを唸らせながらブレードの進行は続く。

連続斉射の効果が得られないと知るや、ヴィシャリスは即座に左腕を上げ、銃砲を放つ。野太い砲身から破壊力の極めて高い榴弾が、轟音を引いて暴れ飛ぶ。軌道は確実に敵機を据え、狭まりつつある両勢の合間を駆けた。

銃撃に臆さず地表を滑るブレードの右腕が動く。掴む出力端末を腕ごとに振り下ろし、形成された刃が自らへ激突する間際で爆裂弾頭を切断した。縦一文字に切り裂かれ、左右へ分離した弾は黒機へ到達する前に爆散。生じた噴煙が厚い幕を下ろし黒と白双方の視界を奪う。

ヴィシャリスは背部バーニアを点火して急速後退へ移った。闇の中に鈍く籠る爆煙から距離を開け、下がりながら機関砲を撃ち込んだ。弾丸は一直線に煙の内部へ吸い込まれていく。が、すぐに噴煙を突き抜けてブレードが姿を現した。やはり左手首素早く回転させ、向かい来る連弾の全てを切り裂き弾き落とす。

その最中、黒いブースターが稼働出力を上昇させた。今まで正面に位置したブレードは獲得した高機動性に乗って、白機の対面を向いたまま横方へ滑っていく。続けて右腕の前腕装甲下部より単分子ワイヤーを撃ち出し、遠く離れた外縁方面へ放った。伸ばされたワイヤーは路上に打ち捨てられた無人機の残骸へ食い込み、姿勢制御を助ける係留索として確保される。自らを支えるポイントを獲得したブレードは急速にワイヤーを巻き戻し、ブースター出力を超過した速度で移動。これへ応じて進路を湾曲させ、外側より白い機体の

側面を狙う形で接近する。

ヴィシャリスも反応して左腕を差し向けた。狙いは一瞬で付けられ、互いに並行移動しながら銃撃を見舞う。トリガー操作によって生まれた反動で、銃身が上方へ跳ね上がる。これを後ろへ捨て置いて、撃ち出された榴弾は慣性に従い標的へと迫った。

しかし両機の合間へ障害物が飛び込み、弾頭を受け止めて不必要に炸裂させる。ヴィシャリスの妨害をし、ブレードを助けたのは魔導兵器の残骸だった。先に帝国機の放ったワイヤーへ繋がれた機体が、射出元の引き戻し操作で投げ飛ばされてきたのだ。偶然ではない。明らかに両機の機動を念頭に置いた、計画的行動である。

予期せぬ遮蔽物の登場で榴弾は敵を襲わず、代わりに盾となった破損躯体をバラバラに粉碎した。爆風と紅蓮の焰が弾け、空気を衝撃の波紋が抜ける。砕け散った黒い断片が黒煙に紛れて飛び散り、センサー類の妨害をする。

この瞬間を狙ってブレードは最高加速に入った。背部推進機関を限界まで噴かし、飛び掛る黒い破片を正面から弾く。そのまま直線機動で一気に駆け、ヴィシャリスとの間合いを零へと潰す。

一瞬で至近距離に迫った帝国機へ、白い右腕が機関砲を向けた。だが指が引き金を動かす前に黒腕がフォトンブレードを払い、機関砲の銃身を中途から斜めに寸断する。切り裂かれた鋼鉄の銃口は、三連装に連なったまま瓦礫の上へ落下した。

重々しい音が足下で鳴る間に黒機は移動し、ヴィシャリスの反応より若干早く背後を取る。白い躯体が立ち位置は逸らさず半回転を掛け、性急に方向転換へ移行。互いに間合いのない状態で背中を取り合おうとする二機だが、先んじて一步を踏んだブレードは右腕を水平に薙いで早手を打つ。

息つく間のない斬撃が後方で走り、ヴィシャリスのバーニアスラストユニットを真横に裂いた。赤い魔力光が大型の推進装置のノズル上端へ減り込み、高熱量で噴射口を焼き切る。刃は更に進んで背部装甲を半分ほど斬り、そこへ到り白機の体動が敵勢へ追いつい

た。

反転した白は正面から敵機を睨む。双方の頭部スリットで光る赤点が、同じ高さから互いを捉えた。その時間は刹那。空白を作らず動いたヴィシャリスの左腕が、荒々しい砲口をブレードの胸部中央へ宛がう。コックピットを狙った零距离射撃。トリガーを引けば、パイロットは肉片も残らず粉碎される必殺のポジション。

だが僅かに早くブレードが妨害を敢行した。直下から膝を打ち上げ、突き付けられた砲身の下面を豪打する。衝撃に銃砲が上がり、狙いは上方へ逸れた。同時に引き金が押し込まれ、銃口が唸る。吐き出された榴弾は胸部でなく、ずれた先でブレードの頭部を吹き飛ばす。直撃された弾丸が爆滅し、炎と破壊の息吹でセンサー統合部位を粉々に破壊した。

両機の間で弾ける衝撃。それでも揺るがない黒と白。ブレードは左腕を素早く払い、ヴィシャリスの胸部装甲を切断する。魔力の形成刃が胸郭を正確に狙い、白い防衛装甲板を食い破った。高出力に力尽くで切り開かれ、分割される防壁が火花を噴く。刃が走り抜けた後、赤い残滓が空中を掻いた。

だが浅い。フォトンブレードは全装甲を突破せず、最終装甲までは傷付けなかった。半歩の踏み込み不足。白の左腕が反撃に動く。射撃をさせまいとブレードの両腕が振り上げられ、同時に打ち下ろされた。ヴィシャリスは迅速に対応し、左右の腕を頭上へ伸ばす。それぞれに握る機関砲と榴弾砲の銃身を交差させ、接点でフォトンブレードの斬撃を受け止めた。

互いに両手を使い、攻防姿勢を固めた二体。ブレードは力任せに刃を押し込み、ヴィシャリスは銃器を交えてこれへ抗う。魔刃と火器の接触面では壮絶な火花が散り、耳を劈く高衝音が鳴り響いた。黒い機体はそれ以上は進む事が出来ず、白い機体は押し上げる事が出来ない。力の拮抗状態が、攻めるも退くもならない状況を作り出す。

既に多大な数の無人機と戦いを経ており、加えて完全起動には程

遠いヴィシャリスの現稼働率では、帝国軍の一軍預かる隊長を押し返す事は出来なかった。

このままでは埒が明かない。それは双方パイロットが等しく思うこと。次の瞬間、先に動いたのはヴィシャリス。敵機の剣筋を押し留めた状態で、右脚を素早く蹴り出した。ブレードの腹部装甲を勢いよく弾き飛ばし、黒機そのものを後方へ強制的に押し飛ばす。

突然の衝撃に土煙を上げながらブレードは後退させられるが、その最中で左腕から出力端末を投擲し、フォトンブレードをヴィシャリスが握る榴弾砲へ叩き付けた。狙い放たれた一撃は砲身の間中部を貫通し、淡い魔力の粒子を零し始める。

敵の目的へ思い至るや、白い機体は巨銃を側方へ投げ捨てた。数秒後、出力端末そのものが爆砕し、貫く砲を道連れに消滅する。

くれてやった武器の代わりを、ブレードは即座に腰から抜き放った。左手が掴んだのは新たな出力端末。第三のフォトンブレードを形成化させ、再度二刀を持ち対する。

頭部を失っても未だ健全な機動を続ける帝国機を前に、ヴィシャリスは使えなくなった機関砲も放り出した。両手から得物を失い無手となると、空いた右腕を軽く振るう。それへ合わせ、手首下部装甲に埋設される出力機関が作動した。掌へ蒼く輝く光の刃が生まれ、従来のフォトンブレードより分厚く長い剣を形作る。同時に左前腕装甲から重量感のあるナックルガードが迫り出てきた。それは左手を包むように装着され、対近接格闘用の拳撃武装として固定化される。

銃器を捨て格闘スタイルを整えたヴィシャリスは、緩やかに腰を落とし戦闘態勢を整え直した。

第9話：“ラゲナ”（前書き）

執筆者ウラン

第9話：“ラグナ”

右腕のフォトンブレードを上段に構え、左の切っ先をヴィシャリスの喉元へと向けて、ブレードは間合いを詰めるべく前進した。

驚異的な威力を持った銃器を失くした敵機は、もはや相手になるはずもない。

それでも想定外のことが起こってもいいようにと、二段構えの戦法をとった第二人格“ラグナ”と反乱軍との戦いの行く末を、13番隊隊長アリア少尉は安心して傍観していた。

しかし、そんな簡単に事が運ぶわけもなく、膨大な空気の振動がブレードを襲った。

直後、火花が散り、地に落ちる右腕とそれに握られたフォトンブレードを確認した“ラグナ”は、大きくバックステップで距離を取る。

方向は南、座標は上、ちょうどアストライアのあるあたりからの狙撃。

先程無人機を破壊していた者と同じである可能性が高い。

体のコントロールを完全に“ラグナ”へと明け渡したアリアは、それまでとは逆に“ラグナ”へ思念で話しかけた。

『私はもう一機について警戒するよう先に言っておいたはずですが』

「……怠ってはいない、見えてはいた。ただ——」

アリアの口を借りて消え入りそうな声で喋る“ラグナ”は、言葉を続ける。

「——ただ、避けきれなかった」

丁度狙い目のタイミングだったことは百も承知していた。

どこから飛んでくるかもわかっていたし、“ラグナ”は視覚で確認するまで至っている。

——それでも、ブレードの機動力では回避しきることは叶わなかった。

ブレードは元々最下級の機体とはいえ、重い銃火器や弾薬を積んでいない分、むしろ他の機体より機動力は上をいつている。

しかし、銃火器を主要装備とするヴィシャリスは、それでもブレードの動きに一步も引けをとってはいなかった。

理不尽なまでの性能差、それが最上位機、ロストアーム遺失魔導兵装と量産型の通常機との大きな隔たりであることは理解していたつもりである。

しかし、それでも“ラグナ”なら覆せるくつがえというのがアリアの見込みであり、油断だった。

ヴィシャリスはほぼ戦闘不可能なレベルまで追い込んだが、それは想定内の範囲。

それどころか、姿を現さないもう一機を含めても壊滅にまで持ち込める見立てでいた。

しかし、それは些か樂觀視が過ぎたようである。

片腕の損傷により半無力化された今、敵機壊滅は困難と判断し、アリアは次の作戦に出ることを選択した。

『ラグナ、これ以上の戦闘は合理的ではありません。ですので、取り合えず手前の一機を破壊して退却しましょう』

「……了解」

『手段はアレでいいです。出し惜しみしても仕方ありませんしね』

“ラグナ”はわかっていると言わんばかりに返事をせず、手前の少し大きめなボタンに視線を固定して、こう告げた。

「……リミッター、解除」

途端、左腕のフォトンブレードの光が消えた。

背部ブースターも起動を中断し、地に足が付く。

突如、ほとばし迸る光が音もなくヴィシャリスを襲った。

次の瞬間には白機の右腕は両断され、拳盾は中央部を抉りとられている。

ヴィシャリスの操縦者、禾槻には何が起こったかすらわからず終いだった。

機械にも限界というものが設定されている。

必要な電量や摩擦速度、それに伴う熱量を考慮すればいたしかたない事実となるわけなのだが、それはあくまで連続的な発動における基準であり、瞬間的な発動であればもう一歩進んだ結果が得られる。

それが限定解除というアリアノラグナの奥の手だった。
リミッター

それまでの数倍の速さで振り出された左腕がヴィシヤリスに重なったほんの一瞬、槍のような長さに元の三回りは太い光粒子の突撃^スが機体へと食い込み、瞬く間に消失した。

“ラグナ”の対応速度は並を逸脱している。

正直、“ラグナ”以外の者がこれをやっても成功する確率は零に近い、というのがアリアの計算の結果だった。

そもそも、最上位機のパフォーマンスをもちてすれば、ブレードのリミッター解除くらいの動きは常態で可能である。

ただし、その動きを操縦者がコントロールしきれるかとは別の問題。いくら最上位機の特別カリキュラムを積んでいるとはいえ、所詮は人間。目に見えない動きなど一瞬すらできるはずもない。

それを可能とするために開発されたのが“ラグナ”という第二人格だった。

“ラグナ”は根本が人間ではなく、視覚情報の兆速処理、及び対応を容易に完了する。

故に、帝国の所有する最上位機を完全に操縦できる最強の乗り手となるはずだった。

まあ、結局は適正のある機体を帝国が所持していなかったために、

13番隊などというならず者の部隊に追いやられてしまったわけだが。

とっさに回避したのか、破壊しきれなかったことを確認した“ラグナ”は未練を残すまでもなく撤退を始めた。

反乱軍側も再戦を恐れたのか、再び狙撃されることはなかった。

第10話：生ける源泉（前書き）

執筆者ういいち

第10話：生ける源泉

「攻めに入らず、逃げる……か」

帝国所属魔導兵装の後姿をバイザー越しに見送りつつ、禾槻は深く息を吐いた。敵機の戦線離脱は今度こそ戦闘終了を意味していたが、その顔は釈然としていない。

帝国機ブレードが決めた渾身の一撃。あれだけの攻撃を行うのだから、相手も捨て身である可能性は高い。連続して使うことは出来ないだろう。右腕を犠牲にすることで凌いだが、あのまま戦いを続行していれば左腕一本でもコックピットを潰し、搭乗者を捻り殺すことは可能だった。近接戦闘こそがヴィシャリス本来の性能を十全に発揮出来るスタイルだからだ。

しかし相手は止めに到らず逃走を選んだ。上空からの援護射撃を警戒しての事もあるだろう。それでも千載一遇の好機と見えた筈の状況に自ら背を向け、早々に離脱する姿勢は戦上手と評せられる。迷いない身の振りの早さは、状況判断力に優れた戦士の証だ。

実力のみが物を言い、才覚一つで幾らでも成り上がれる帝国の中にあつて、目先の功績に囚われず冷静な対処が出来る人材。しかも卓越した操縦センスを有し、機体性能の格差を恐れずに切り込んでくる剛毅さを併せ持つ。型に嵌らず動きが読めない故に厄介な相手である。ここで仕留められなかったのは、失敗だったかもしれない。背部バーニアさえ無事であれば、追撃する事も出来たのだが。

「帝国のダニめ」

ブレードの去った方角を睨み見るまま、禾槻は忌まわしさの含まれた暗い声を漏らす。音が鳴るほど強く奥歯を噛み締め、操縦桿を指が白くなるほど過剰に握り締めた。

今後の行動方針や戦術的見地から、敵を逃したことへ苛立っているわけではない。帝国に属する存在を絶命させられなかったこと、それそのものが彼の噴気を煽っていた。帝国への根深い恨みが、猛

烈な復讐心が、たった一人であれ帝国軍人の逃走を許した現実に自制不能なほど激しく打ち震える。

「……次は殺す」

我知らず唇を噛み、既に遠く去った敵勢へ禾槻は宣言した。凄まじい怨念をくべて燃え滾る赫怒が、吐き出される言葉に闇色の悪意を塗りたくる。帝国へ関わる全てを等しく呪い疎む害気が、煮え立つ鍋底同然に奔騰していた。

食い込む犬歯が唇を破り、一筋の赤い雫を垂らす。それに青年は気付かぬまま、遙か帝都方面を睨み続けた。

都市オルセルドでの帝国軍掃討作戦を完了させたヴィシャリスは、降下してきた反乱軍旗艦アストライアに無事回収された。推進機関を破壊されていたため上昇機動が取れず、地上へ着陸した艦体へ自ら乗り込んだのだ。そのまま整備ドックを兼任する格納庫へ収まり、現在は指定区画で整備班の預かりとなっている。

健全な二本の脚で硬い床板を踏み締めながら、整備班員の誘導で所定の位置に停止したヴィシャリスは、魔導機関の出力を落とし眠りに就いた。大気から常時魔力を吸収して稼動するシステムが、エネルギー供給を断絶させると同時に、機体内奥で繰り返されていた人工の鼓動が止まる。

それと合わせてコックピットに出現していたホログラムモニターは次々と消失し、各機器の淡い青光も弱まり果てていった。全ての光が消え去ると、手狭な操縦席は完全な闇に包まれる。外部から一切光の差し込む余地がない閉鎖空間であるため、齎される暗黒は厚く重く、決して目が慣れることはない。それでも禾槻が不安を抱かないのは、もはやこの闇こそが第二の故郷と呼べるほどに慣れ親しんだものであるからだろう。

何処か遠くで金属の動く重い音がした。コックピットを内包する防衛装甲のロックが解除された音だ。裏付けるように低く響く駆動

音が始まり、真闇のずっと前方で無機物の巨大な気配が規則的に動く。積層する装甲殻が順次展開しているのだと、禾槻は知っている。数秒を待たず、深い闇の世界に光の亀裂が入った。丁度足首の高さで、それはシートを囲むよう半円系に走る。そうかと思えば正面の最終防衛層が上方へと引き上げられ、コックピットへ射し込む光量は急増した。操縦席を外部と隔絶していたコアフレームが開放される。重厚な胸郭内部装甲は滑らかに上昇し、内外の境界を取り払う。

鋼鉄の囲いが失われると、今まで塞き止められていた外光が一斉に禾槻へと襲い掛かり、彼の視界を焼いた。全身へ絡みつくような闇から光の世界に突き出されたことで、青年は顔を引いて何度も瞬くクロス型のシート固定ベルトを取り外した後、右手をひさし代わりに立ち上がった。

現在では失われた技術と繊維で組み上げられる茶色いシートから離れ、コックピットへ横付けされたタラップに移る。鈍い光沢の宿る鉄製階段を踏むと、軍用ブーツの靴底から甲高い音が鳴った。聴覚を刺激する少々耳障りな単音をリズムカルに響かせ、禾槻は足早に駆け下りる。

使い慣れた梯子段を蹴立てながら、格納庫の中を何気もなく眺め見た。天井は高く遠い。魔導兵装の巨体が収められて尚、まだ余裕がある。幾つもの大型照明装置が等間隔に設置され、真昼のような明光を降り注がせる。

空間そのものは奥行きも横幅も充分で、とても広大だ。構成素材には特別な意匠も、特定のカラーリングも施されていないので、骨子や地肌が剥き出し無骨な印象を受けた。なまじ明るいからこそ、索漠とした雰囲気が強く醸し出されている。

鋼板を打ち付けて形成された平たい床には、大小無数の機材や部品や工具が散乱し、クレーンやリフトが方々に設置され、コンテナの群が積み上げられていた。太いパイプやチューブ、色とりどりのコードが其処彼処から伸びって別所へと繋がり、その合間を白いツ

ナギ姿の作業員が走り回る。

禾槻は長いタラップを途中まで下ると、寄り添う形で付設された昇降機に移った。端から端までが5mほどある大型の装置で、ヴィシャリスの腹部を正面にする。その中程まで進んだ青年の手が、素早く装甲の一角へ触れた。瞬間、鳩尾に位置する防衛装甲が白煙を噴き、周辺部一帯と共に動き始める。

腹部最外壁が上方へ滑り、第二層殻が下方へ落ちた。第三・第四装甲は同時に左右へと引き、第五防壁は上下四方へ分割展開される。五つの防御装甲が全て開放されると、腹体奥部から繭の如き物体が露出した。白い金属製のそれは、交互に合わされた爪状の部位で前膜部を形成し、隙間なく狭まった肋骨のようにも見える。表面には大量の水滴を付着させ、隙間からは黄土色の液体を滴らせていた。

露となった内奥機関を目指し、禾槻はヴィシャリスの腹部へと踏み込む。恐ろしく硬い防御殻を靴底で押し、開かれた通路を真っ直ぐに進んだ。そのまま金属の繭を眼前にして立つと、彼の到着を待っていたかのように繭が反応を示す。

白い爪状の部位が上から一つずつ、左右交互に外へ開き、閉ざされていた前膜の開放を始める。外された拘束に合わせて、繭の正面から大量の液体が流れ出てきた。それは黄土色に光り、油めいた艶を含んでいる。溢れる液体は装甲の隙間へ流れ込み、禾槻が穿く袴の裾とブーツを濡らした。

その間にも爪状の膜部は、次々と外側へ開いていく。規則的に、まるで蕾が花開くかのように。液体の流出が殆ど止まる頃、金属の蔽いも最下段までの展開を終えた。同時に繭の後方から、霧状になった冷気が勢いよく噴射される。

全ての爪が正面の囲いを解くと、繭の中から女性が倒れ出てきた。後ろ腰に届くほどの金髪にあの液体を光らせ、全身もまた濡らした状態で。重力に引かれて倒れる線の細い体を、禾槻は両手で素早く抱き止めた。水気を含み重さの増した金髪が、青年の体と女性の背へ相次いで落ちる。

女性を抱き止めたまま禾槻はゆつくりと後退し、今来た道を戻り始めた。力なく垂らされた腕や、華奢な体が装甲板にぶつからないよう注意しつつ、通路とも呼べない狭い機体腹奥を慎重に進む。侵入時よりも時間を掛けて昇降機まで辿り着くと、彼女を床に横たえ、埋め込み式の稼動ボタンを押す。

広い昇降装置がタラップの横を水平に下り出すのを見て、禾槻は女性の傍らに跪いた。そうして液体に濡れる端整な貌を覗き込む。彼女が身に着けているのは、ボディラインが浮き出るほどピッタリとしたレオタード型のスーツ。白を基調として所々に青線が走る以外、これといった装飾のない無機質な作りである。覆うものもなく曝け出されている腕や脚、顔は驚くほど白い。その上へ黄土色の液体が作る薄い膜と、無数の水滴が付着していた。

「エレーナ」

目を瞑ったまま身動きしない女性に、禾槻はそつと声を掛けた。表情は酷く心配そうであるが、囁きは穏やかで優しい。

その呼び声に反応して、彼女の瞼が微かに震えた。次いで静かに目が開かれ、鮮やかな碧眼が青年の顔を映す。

「……禾槻さん」

小さくか細い声が、桜色の唇から零れ出た。鈴が転がるような澄んだ声音だ。エレーナの声を聞いた瞬間、禾槻の顔から不安が消え、入れ替わりに笑みが浮かぶ。

「ごめん。思いのほか、戦闘が長引いた。またきみに負担を掛けさせてしまったね」

眉根を寄せて申し訳なさそうに言う禾槻に、エレーナは柔らかな微笑を返した。顔には血の気がなく、濃い疲労の色が覗いている。それでも浮かべられる笑顔は朗らかで、心からの安らぎを感じさせた。

「私は、大丈夫です。少し、疲れただけですから。休めば、すぐに……」

弱々しく言葉を紡ぐ最中、エレーナの瞼は再び閉じてしまった。

完全に気を失つたらしい。

そんな彼女の姿を、禾槻は沈痛な面持ちで見詰める。青年の面貌は哀しみ、辛さ、後悔、苦しさ、様々な感情が混ざり合う極彩色で占められていた。名状し難い複雑な表情で、今は静かに眠るエレナの顔を見守る。

第11話：苦楽共する仲間達（前）（前書き）

執筆者ういいち

第11話：苦樂共する仲間達（前）

昇降機が最下段まで到達すると、禾槻はエレナを横抱きにして鋼板の上へ降り立った。すると傍で待機していた白衣姿の男女が四人、寝台車を押して近付いてくる。

彼等が正面に到達すると、禾槻は傷病者搬送用の寝台に優しくエレナを横たえた。彼が手を離して一步下がるのと同時に、医務室所属の治療班三名はストレッチャーを押して出口へと走る。後に残されたのは羽織袴姿の青年と、白衣を着た桃色髪の女性のみ。

「彼女のことなら心配しなくていいわ。あたし達が責任を持って処置するから」

遠ざかる白衣と寝台を見送る禾槻へ、ただ一人残った女性が笑いかけた。桃色の髪を肩口で切り揃えた、二十代半ばと思しき白衣の女性だ。面長で、眉が細く、切れ長の目をしている。

医務室の最高責任者を務める有能な女医、リーナ・シュペルスワ。彼女は水色の瞳で禾槻を見ながら、険のない顔に人懐こそうな笑みを浮かべる。

「先生、御願います」

邪気のない医師の目を見詰め返し、禾槻は頭を下げた。生真面目な青年の姿勢にリーナは微笑んだまま、自分に向けられた頭の上へ軽く手を置く。

「まっかせなさい。リーナ先生がちゃんとは面倒見てあげるから。大船に乗った気でいて」

顔を上げた禾槻へ笑いかけ、リーナは親指を立ててみせる。得意気な表情は自信と慈愛に満ちているが、同時に十代の少女然とした快活さも併せ持つ。彼女は多方面に秀でるエリート医師なのだが、そうとは感じさせない親しみ易さがあった。

「大丈夫、エレナちゃんはずいぶん良くなるわ。だから霧川君も、あんまり自分を責めないこと。そんな若いうちから悩んでばかりい

ると、ハゲちゃうわよ？」

禾槻の額に人差し指を押し当てて、リーナは真面目な顔で通告する。諭された側は呆然と、発言者の顔を見詰めていた。

「……ぷつ。あははは。先生、それは可笑しいですよ」

少しして禾槻は小さく吹き出す。堪りかねたように破顔すると、肩を小刻みに震わせた。そんな青年を前にして、女医は悪戯っぽい笑みを返した。

「そうそう。そうやって笑ってなさい。眉間に皺寄せると、せつかくの可愛い顔が台無しよ」

軽口混じりに人差し指へ力を入れ、リーナは禾槻の頭を軽く押す。気安い口調と遠慮のない仕草は、弟か友達に接するようでもある。その気取らないありようが、彼女の人となりを表しているようだった。

「それじゃ、あたしはもう行くけど。霧川君、後で医務室に来るのよ。言っておくけど、エレーナちゃんのお見舞いじゃないから。あなたの検査でね」

「はい。報告が終わったら、ちゃんと行きます」

「よろしい。エリアス君も来るのよ！」

禾槻の素直な返答に頷いた後、リーナはその後ろへ声を投げた。禾槻が振り返って見ると、ヴィシャリス同様停止したヴァニティスウェルから降りたパイロット、レリオがこちらへ向かい歩いてきている。

「りょーかい」

エリート女医の名指しに、レリオは片手を上げて応じた。それに満足したのか、リーナは白衣の裾を翻し、二人へ背を向け歩き出す。治療班の仲間達が去った方向を目指して進みながら、後に残る二人へ軽やかに手を振った。

「俺はあんまり医務室って好きじゃないんだよな。あの独特な空気がどうも」

禾槻の隣へ立ったレリオが、苦い顔で頭を掻く。徐々に遠退くり

「ナへ聞こえないよう、声のトーンは幾らか落としている。

「それでも行かなきゃね。パイロットは体が資本なんだから」

「分かってるって」

同僚の肩を叩いて正論に賛意すると、レリオは口元を緩めた。

二人は魔導兵装のパイロットとして日々激戦へ臨む戦友同士である。過酷な戦場経験を経て認め合い、信頼し合う間柄だ。互いに気心も知れ、交わす言葉に遠慮や気後れはない。

「それにしても今日は危なかったな」

「ああ、まあ、ね」

それまで浮かべていた笑顔を曇らせ、レリオは両腕を組む。それへ曖昧な微苦笑を返し、禾槻は頬を掻いた。少々バツが悪そうでもある。

「例の如くシステムが落ちてたんで暫く見れなかったんだけどな。

復旧してからお前の様子を確認したら苦戦してるじゃないか。いやあ、驚いたぜ」

レリオは胸の前で腕を組んだまま、神妙な面持ちで目を閉じた。

思案の表情で首を傾げ、喉奥から低く唸る。

「禾槻をあそこまで追い詰めるとは、只者じゃないな。機体こそ何の変哲もない量産型だったが、操縦テクニクは一兵卒と思えない。かなりの腕前だぞ」

「帝国將軍ではないにしろ、数ある部隊の隊長クラスなんじゃないかと思う。それも特別な訓練を受けたか、或いは何か調整措置を施された者か」

「ほほお、そりやまたなんで？」

顎に手をあて目を細める禾槻へ、レリオは興味の眼差し向ける。

口調こそ陽気だが、双眸に宿る光は戦士のそれだ。

「直接戦って感じたんだけど、普通の兵士とは反応が違ったよ。不気味なぐらい読みが鋭いしね。あれは何か特別な施術を受けてると考えるのが自然だな」

「なるほど。帝国の性格上、手の加えられた戦士が使い捨ての末端

要員に燻っている可能性は極めて低い。単機で突っ込んできた事から考えても、ある程度作戦行動に自由が利く立場か。そうなると確かに隊長クラスが妥当だな」

レリオは自分達の推論に納得し、独り何度も相槌を打った。その横で禾槻は淡く笑い、満足気な同僚の姿を微笑ましそうに見ている。朗らかな顔に少し前の深刻さはなく、レリオへの気の許しように知れる。

「とにかく助かったよ。あのまま戦っても勝てた自信はあるけど、あまり長時間戦闘してはいたくなかったから」

「そうだろうと思ってな。これで貸し一つだ」

素直に感謝の言葉を口にする禾槻へ、レリオは齒を見せて軽快に笑った。人差し指を一本立てて覗かせる笑みには愛嬌があり、見ている側も自然と顔が綻んでくる。

「あれ？ 前の戦いで僕の方が貸しを作ってなかったっけ。だから、これでチャラだよ」

「いや待て。それは違う。だって前々回で俺が敵の注意を引き付けて……」

「この前、リリナさんから匿ってあげたこと忘れてないよね？」

「うっ！ それを持ち出されると弱い」

楽しげに語らう若者達の姿は年相応で、とても巨大な戦闘兵器を駆る反乱軍の闘士には見えない。

敵と対せば幾多も傷付き、大量の返り血を浴びてきた狂猛な猟犬達。しかし仲間と共にある時は、和やかに賑やかに人らしく笑顔を交わす事が出来る。その間にあるのは何物にも代え難い明確な絆であり、等しく連なる強固な連帯感だ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6969q/>

I F —輝ける明光

2011年2月15日23時40分発行